

## メソダイズムと労働組合運動の社会的世界論

—アーネスト・バージェスの博士論文に学ぶ—

鎌田大資\*

Applying Social Worlds Perspective to Methodism and Trade Unionism:  
—Based on the Findings of Ernest Burgess' Ph.D. Dissertation.—

Daisuke KAMADA

世界で最初に社会学部を設置し、20世紀前半の社会学界に支配的な影響力を行使した初期シカゴ学派の社会学者たちは、初代社会学部長アルビオン・スモールを中心に、アメリカ社会学会を組織し、その機関誌 *American Journal of Sociology* を編集した。そして、ロバート・パークとアーネスト・バージェスの共編著である教科書『科学としての社会学入門』(Park & Burgess [1921] 1924)<sup>1</sup> で注目を集め、さらにやはりパークとバージェスで推進したシカゴ市の多様な地区、住民集団をめぐる都市研究や、その成果としてのモノグラフ群の出版によりシカゴ・スタイルの社会学を世に知らしめた。しかしその最盛期は、シカゴ大学出身の社会学者、チャールズ・ジョンソンがアトランタで率いるフィスク大学に、パークが転出する1935年ごろまでと比較的短く、その後は、コロンビアやハーバードなど他大学の社会学部充実の陰に隠れて、全米における指導的 sociology 研究大学の一つという位置づけに甘んじるようになる。そして、質的、量的にシカゴ市の具体的社会現象を克明に記述したモノグラフの伝統は、ジョージ・ミードのプラグマティズム哲学を基盤とし、ハーバート・ブルーマーとエヴェレット・ヒューズが指導した経験社会学の流派、シンボリック・インタラクショニズム (symbolic interactionism. 以下、SI と表記) の伝統に引きつがれ、今日に至るまで、多様なエスノグラフィや理論的考察を産出する源泉となっている。そして現代の SI の社会理論を構成する有力な理論的イメージとしては、アンセルム・ストラウスの社会的世界 (social worlds) 論のパースペクティブがある (宝月 2010; 山口 2007)。

バージェスが1966年に亡くなる少しまえにこの世に生をうけた論者は、大学院生時代から SI 研究に志し、ハワード・ベッカーやストラウスについての考察から出発して、20世紀末には初期シカゴ社会学を再検討する研究会に加わり、21世紀初頭からはアーネスト・バージェスの学問教育業績を考察してきた。そして近年では、従来、学説史研究者がまともに言及することすらなかったバージェスの博士論文に注目し、そこに書きこまれたイギリスの社会史やバージェス執筆当時の社会学の理論状況に目配りしながら、解釈を加えてきた (鎌田 1916, 1916a)。特に前稿 (鎌田 1918) では、バージェスが社会学における多様な研究分野を開拓し、その知見をもとに新たな専門職を立ち上げていく活動を、のちにストラウスが展開する社会的世界論の原型的イメージとして想定してみた。またストラウス自身がカリフォルニア大学への転出後、看護学研究者を教育して、自身のグラウンデッド理論アプローチを軸にした質的研究

\*人間関係学科 准教授

法を創出し、看護学、社会福祉などに応用できる多数の教科書やマニュアルを出版し、その普及に努めたという実践の手本を、バージェスの実践に見いだしたのではないかとも考えた。ただしシカゴ大学への社会学部の設置自体が、大学での教育研究という分野に社会学という新参学問を導入し、社会学者という新種の研究者を養成し送り出す試みだったことを考えると、バージェスやストラウスも、スモールら最初の世代の教員たちの、新分野の開拓とそこでの人材養成を引きついでと考えてもよいかもしれない。

以下、バージェス博士論文での「検証された知識」の社会的活用に関する主張を、のちの専門職論の系譜につながる考察として再検討し（1節）、ストラウスが提示した社会的世界論について、その応用可能性を中心に改めて検討する（2節）。さらにメソディズムとイギリスにおける労働組合運動についてバージェスが記述した意外な結びつきを事例として、それ以降に見いだされた教派史や社会史の諸事実を含めて概観し（3節）、最終的にそうした歴史過程を社会的世界論により再整理する（4節）。

## 1. バージェスの専門職立ちあげと博士論文での専門家観の再検討

本論は、前稿で解釈したバージェスの博士論文の記述内容に全面的に依拠している。本論標題のメソディズムと労働組合運動に関する社会史的考察は、その第2部の英国史における社会化として記述されている。

バージェスは学問的生涯をかけて、社会学の研究技法から派生する知的資源の開発と、その資源に準拠した専門職立ちあげ活動を追究した。そしてストラウスも、主に医療社会学の分野において調査研究を積みかさねながら多くの研究者を教育し、新たな研究手法を看護研究その他の領域に新たに定着させた。バージェスとストラウスの師弟の営みは、ストラウスが社会的世界論の枠組みで論じようとした社会運動体や制度体の動向に、そのままの形で該当し、ストラウス自身の発想源として想定できると思われる。

したがって、論者はバージェス博士論文の議論自体に、ストラウスの枠組みに相当する何かが含まれていると主張してはいない。ただしバージェスは、自身の追究する専門職立ちあげ活動の抱負のように読めるアイデアを、博士論文の主張そのものとして書きこんでいるように思われる。また博士論文の執筆、資格審査、公刊のための再検討の期間をオハイオ、カンザス州の3つの大学で過ごしたバージェスが、シカゴ大学に教員として着任するにあたっての知的宣言の役割を、この論文が果たしているのではないかとも考えられる。それゆえ、本節では、バージェスの博士論文において本論で考察する社会的世界論の枠組みや、専門職組織立ちあげ活動と関連する主張や箇所について再検討し、次節以降の考察の足がためを試みたい。

まずバージェスの社会化という考え方は、まず社会主義起源の「私的所有の廃止」という語義に、ジンメル<sup>1</sup>の集団形成としての社会化（Vergesellschaftung）という用例により、意味の揺らぎを加え、チャールズ・クーリーの子どもの発達研究、進行中であったジョージ・ミードの他者の態度や役割の取得、一般化された他者の態度、役割の取得といったSIの基本概念形成の機運を得て、最終的に、青少年の発達過程での所属集団の文化的価値の内面化という、まず1930年代終盤に人類学で定着し、やがて教育学、心理学、社会学で現在も使用される語義に近づく考え方を獲得した。それは、「検証され、蓄積された知識の活用」を通じて進展する社会進化や進歩への参加であり、具体的には当時、社会的エリートとして形成されつつあった専門職の、専門知の形成、独占、活用を通じた職業活動による社会への貢献と考えられる<sup>2</sup>（鎌田 2018:146-149; Abbott 1988; Perkin 1988）。ただし、現在の時点において、通常、専門職と

して言及される医師、法律家、聖職者、大学教授などの職業は、社会的混乱期における地位変動のさなかにあり、明示的な形では言及されていない。

バージェスは、著名なジャーナリストかつリベラルな社会批判家であるハーバート・クロリーの著作に言及し、社会のトレンドを彼の著作から摂取する形で議論を構成している。念のため、関連箇所を訳出しておく<sup>3</sup>。

最終的な分析において、前述の非難<sup>4</sup>は専門家と一般大衆（mass of people）のあいだに隔てがあるという点にまとめられる。確かにこの申し立ては全面的に否定されはしない。この裂け目は、まず一つに、[専門家たちが]<sup>5</sup>知的に超然としていることから来る裂け目であるだけではなく、相手を理解できないことから来るものでもある。さらに<sup>6</sup>専門家の側での人々への軽蔑と、それに呼応した大衆の側での専門家の無関心さへの不信感から来る裂け目であるということを指摘された場合に、この告発はもっと深刻なものとなる。また、その分離が共感という面で生じている限り、困難は認知的というよりも情動的な社会化にある。しかし、問題が知的分離に関するものである限り、あるいはその結果、情動的にも区別の線びきがなされるものである限り、その点はここ<sup>7</sup>で考察されることになる。まず第一に、その区別は相対的なものに過ぎず<sup>8</sup>、ある活動部門の専門家は、ほかの活動に関しては未分化の大衆の一部であるということ、わたしたちは認識しなければならない。同時に、専門化が進行するにつれ協同という問題も生じることも確かである。専門の細分化に対して知識の全状態についての包括的な見解<sup>9</sup>がその中和剤として必要になる。（Burgess 1916:186）

ここでは、バージェスが唱える「検証され、蓄積された知識の活用」を通じて進展する社会進化や進歩への参加という社会化の理念に、反感をかきたてる知的スキャンダルを構成する営利的または、まやかしの知識の活用事例が挙げられ、当時の労働大衆が素朴にいただいていた専門家への反感がそれを包括する社会の風潮として言及される。さらに念のため、引用されているクロリーの原典を参照してみると、当該部分を含む章において節を立てて語られているのは、企業家（Business Specialist）、政治家（Political Specialist）、おそらくは専門化した労働組合（Labor Union）、法律家が運営する政府（Government by Law）への一般大衆の反感である（Croly 1909:105-137）。これらは社会主義、共産主義の文脈で労働者対資本家などと、階級意識的な民衆の反感が向けられる対象を指示している。しかし参照箇所そのものを見ると、「あらゆる種類の技術の専門家、すなわちエンジニア、文筆家、芸術家は、全員が独自の特殊な利害や目的を精力的に強調してきた」（Croly 1909:138）とある。そこでは、近年、常に強烈な職業的威信を持つ職種として地位を確立してきた医師のような業種は含まれない。しかし、現行の専門職論で語られる人々のうち、その周辺部分にあたる人々を意識した文言になっている<sup>10</sup>。

シカゴ学派からSIへの理論的継承、またバージェス自身が社会学の調査技法を次々に開発し、調査知見を活用する専門職の立ちあげを実現していった学問的、社会的活動経歴を考えると、この「検証され、蓄積された知識の活用」を通じて進展する社会進化や進歩への参加として、自身の取りくみを暗示する見解を表明し、のちの専門職批判を萌芽的に先どりする言説を参照している意義は検討に値する。しかしバージェス自身は、こうして「専門家」への反感の存在は認めるが、それでも悪評にめげず正当な社会的評価を得るべく吟味された「知識の活用」、

そしてそれを通じて社会の進化、進歩へ貢献する可能性を提唱している。

ここでの志を実現するように、バージェスは、1、家族社会学という分野の創出と普及に努め、2、シカゴ市を対象にした都市研究にシカゴ・アプローチと呼ばれる独特の視点を打ち出し、3、囚人の仮釈放の予測尺度を構成して、仮釈放に関しその正否を判定する社会学的アクチュアリーという職種を立ちあげて、大学院生を刑務所での研究、実務に従事させ、4、結婚と婚約の成否の予測尺度を作成して、その知見をもとに結婚カウンセラーという職種を立ちあげ、社会学者との協力体制を取らせようとした(鎌田 2010, 2011)。こうした活動の一つ一つは、バージェスが創案、推進した研究手法や研究対象を軸に新たな専門職や専門研究分野を形成しようとする試みと考えられる。

## 2. 社会的世界論とは——アンセルム・ストラウスの発案

本節では、ストラウスの社会的世界論の概略を述べ、現代の社会現象および本論で取り扱う歴史的な社会現象について活用する可能性を検討する。

ストラウスは1970年代末から80年代初頭にかけてのいくつかの論文で「社会的世界」のパーспекティブを提示し、その考え方は彼がバーニー・グレイザーとともに切りひらいたグラウンディド理論が定着した看護やパラメディカル分野を中心に、20世紀末から医療、科学者の研究に活用されてきた (Strauss 1978, 1982, 1984; Glaser & Strauss 1965=1988, 1967=1996; Fujimura 1996; Clarke 1998)。生殖医療や先端医学における研究において、ストラウスのパーспекティブは、フーコーの言説分析 (Foucault 1966=1974, 2004=2008 など) と組み合わせられて利用されるのも特徴である。

まずストラウス自身の文言に若干の編集を加え、そのオリジナルな主張を整理してみる。

オペラ、バレエ、野球、サーフィン、芸術、切手収集、登山、カントリー・ミュージック、同性愛、政治、医療、法、産業、数学、科学、カトリシズムなど [に関する社会的世界が]、空間、対象、技術また技巧、イデオロギー、(他の社会的世界との) 交錯、(メンバーの) リクルートなどを通じ、もとのものから分かれて下位世界に分化、ほかの社会的世界と合流し、新たな社会的世界として勢力を拡大する (鎌田 2014:35; Strauss 1978:121, 1982:172, 1984:124-125)。

社会的世界という言葉自体はシカゴ・モノグラフにも登場し普通に使われているが、社会学分野でのフィールドワーク、エスノグラフィの歴史を辿りなおしつつ、その意味する範囲を考えてみよう。すると、初期シカゴ学派のモノグラフ群が扱っていたシカゴ市における各種の民族的コミュニティの生活様式というテーマは、ヒューズとその学生が研究した各種職業集団の業務慣行から派生する特殊なパーспекティブの研究に移行し、さらにベッカーが編集する *Social Problems* 誌上などで展開した逸脱の社会学においての、各種の逸脱した生活慣行をもつ集団のサブカルチャー研究も含めて、エスノグラフィの研究対象が時代とともに多様化していくことに気づかされる (鎌田 2018)。ただし、初期シカゴ学派が扱った民族集団から、1930年代末にSIという呼称 (Blumer 1937) が考案されてからの職業集団、小集団の生活文化、サブカルチャーへと研究が進展していくにつれて、研究対象となる集団の規模は縮小し、細分化されていく。こうした趨勢のなかで、各種のエスノグラフィが一貫して対象としたのは人々が共有する生活様式としての文化であり、その意味でエスノグラフィとは、フィールドワーカ

ーが現地の生活習慣や業務慣行を調査し、抽出した文化の記述といえる（鎌田 2006）。

研究史に関するこうした背景を考慮すると、社会的世界は、記述される個々の文化を共有し、それが通用する共同体の範囲を示すと考えてもよい（Shibutani 1955,1962）。とすると、この概念はフィールドワークをおこなうエスノグラファーがエスノグラフィを製作する際に記述する対象自体を示すものとして、質的研究において汎用的な意味をもつ。しかしそれにとどまらず、ストラウス自身が定義づけの文言で述べているように、社会的世界を成立させるイデオロギーや活動の実践の様式などが確立、変容し、ある人々に受容、排斥されることによって、その活動をめぐり形成された社会集団が生成、分化、合流、消滅することを記述し、多様なレベルで観察される集団自体の勢力消長を時代の流れのなかで論じる枠組として、社会的世界論を活用できる。すなわちそれは、一人のフィールドワーカーが調査地で観察、報告しうる期間を、そして一個人の生涯をも超えて、長期間にわたる集団勢力の消長を対象とした歴史分析を導く概念としてもちいられうる。

この場合、社会的世界論による研究は、各種文書資料を駆使した歴史研究に社会学的視座を組みこんだ学際的、越境的なものとなる。またその際のアプローチは、文献資料の読解や解釈による質的な分析と、統計資料が活用できる場合に可能になる数量的分析を、組み合わせたハイブリッドなものを想定してもよい<sup>11</sup>。

またストラウスの晩年のテキストでは、複数の異質な領域に属する社会的世界の衝突や交錯を、アリーナ（arenas）という言葉をもちいて整理している。たとえばエイズの治療法開発をめぐる社会運動においては、免疫不全症候群という症状をもたらすウイルスの発見とその対処法の研究をになう基礎医学研究という社会的世界と、新薬の開発と販売を目指し大量の知見データを集めて、薬物行政の許認可審議に合格することを目指す製薬企業が属する営利的な社会的世界、またエイズをヨーロッパ系男性のみを的にかけた神の意志の現われと見なすなど、必ずしも合理的信念のみで動いているといえない人権運動家の社会的世界が衝突し、通常はそれぞれ別のアリーナに属する者同士が干渉しあって、現実の社会現象の流れを形成、決定していく事態が簡潔に記述、考察されている（Strauss 1993: 225-243）。この場合、アリーナの衝突は科学、医療、社会意識の文脈で観察されたが、次節で見る事例では、信仰と労働運動、さらに政策調査の内容を全英国民レベルに一般化する政治党派など、それぞれ別個のアリーナに属する社会的世界やその参加者たちが干渉しあい、社会変動が生じた。

### 3. メソディズムの社会史——英国史、キリスト教会派史からの再構成

本節では、バージェス博士論文第2部10章で展開される歴史的経緯を振りかえり、社会的世界論の視点でまとめ直すべき素材を提示する。すなわち、バージェスの記述では、英国教会の内部会派としてメソディストという集団が形成され、工業化していく英国の基幹産業である炭鉱業などにおいて、メソディストの分派に属する巡回説教者が初期の労働組合活動のリーダーとしてかわり、その組織化に貢献したのち、そこで編みだされた産業（労災）保険、失業、傷病年金などの対策が、フェビアンであるウェット夫妻により集大成されて現行の社会福祉体制や福祉国家の考え方が生みだされていく。そこに展開する社会現象は、ピューリタン革命後の混乱の渦中で、人々が自身の拠ってたつ宗教思想や活動を模索した際の、当初の目論見からかけ離れた結果が出現していく予期せざる結果の連続であり、社会的世界の発生、分派、連合、終焉という過程が繰り返されなされていくなかで、瓢箪から駒が出るように社会情勢や社会組織が窺変していく顛末を記述するものである<sup>12</sup>。

国教会が支配するイギリスの宗教界において、メソディストは非国教会系の最大勢力といわれ、産業革命後の近代化の道のりにおいても無視しえない影響力を及ぼした。当時、地方教会を任地とする国教会の牧師の多くは、ロンドンで政務関係の役職につき収入を得て、任地の教会をほぼ留守にしていた。たとえば、18世紀のウッドフォードという国教会牧師の教会の礼拝へは、村の10%前後の家族がくる程度で出席率が低かった。ヴァレンタインやトーマスなどの聖人の祝日には、牧師が参会者に小額の貨幣の施しをするという理由で出席者が倍増した(山中 1990:54)。こうした宗教的土壌で、特に国教会の牧師が不在となっている地方を中心にメソディストは驚異的に教勢を伸ばしていった。具体的な数字を挙げると、たとえば1801年のメソディストの信者数は91825人でイギリスの成人人口に対して1.6%、1841年には435591人で同4.5%であった(山中 1990:36-37)。ふだん教会に行かない家族が多いなかで、メソディストの会派に加わる人々は、成人人口のなかでは少数派ではあっても、実際に国教会の教会で礼拝する人数の半数近くに達した可能性もある。彼らはできるだけ礼拝に参加しようとしただろうし、教派の教えを積極的に学ぶ意欲もあっただろう。

しかしその開祖、ジョン・ウェスレーは、自己の会派であるメソディズムをあくまでも英国教会内にあるものとして捉えており、あからさまに国教会から袂を分かつような動きには否定的だった。ちなみに日本語で「きっちり屋」などという訳語で紹介されるメソディストは、極力、英国教会で定めている戒律を守ろうとする人を指し、オックスフォードの学寮で神学生の集いである神聖クラブとして発足した当初から、1、すべての人々にできる限りの「善をおこなう」こと、2、機会のある限りしばしば聖餐を受けること、3、国教会の断食を厳守することの3点を守る人という原義がある(岸田 1977:314)。

とはいえ、メソディストたちは伝道活動の必要に迫られ、徐々に英国教会の規範を乗り越える実践をも採用していく。そもそも国教会は、宗教改革後のカソリックとプロテスタントの争いを鎮めるもくろみもあり、ヘンリー8世により創設された教派である。あくまでも国教会の規律に従おうとするのがウェスレーのメソディズムだが、しかし、彼らが信じた国教会やその規律も、ピューリタン革命と名誉革命を含む時代の奔流のなかにもまれる落ち葉のように揺れうごき、時には引きさかれ雲散霧消した。

プロテスタント発生以降の、カルヴァンらの予定説を厳格に解釈すると、誰が救われているかは神にしかわからず、人間の地上の行為にかかわらず最初からすでに決定されていると考えることになる。確かにウェーバーもいうように、こうした考え方は信者の心に絶望を呼びおこし、時として自暴自棄にも近い社会不安がもたらされたはずである。しかし国教会では、神の祝福により地上の多くの人は最初から救われていると考え、予定説の解釈をやわらげるオランダ発祥のアルミニウス派の思考法が導入された。それはウィリアム・ロード、いわゆるロード大主教の手で、王権神授説と結びあわされて、チャールズ1世の王政下に国教会の公式教義となり、スコットランドを牙城とする長老派をはじめ、国教会にも広まりかけていたカルヴィニストを一時的に抑える働きもした(山田 1997:127-128)。ところがオリヴァー・クロムウェルの率いるピューリタン革命により、チャールズ1世もロード大主教も処刑され、アルミニウス派かつチャールズ1世を擁護する「王党派」でもあった高教会派は野に下り、前王への忠誠を貫き当代の君主に従うことを拒絶する臣従拒誓者(nonjuror)と呼ばれる政治的立場が、聖職者のあいだに形成されはじめる。クロムウェルの死によりピューリタン革命が終了し、王政復古の時代になると、高教会派は再び国教会の中枢部にかえり咲くが、しかし名誉革命によりジェームズ1世が即位すると、再び国教会の非主流派の立場に甘んじることになる。こうした歴

史の激流のなかで高教会派たらんとして採用されたウェスレーのメソディズムは、極度の保守といった外見をまといているが、王政から議会制民主主義へと移行する世の趨勢において、いつしかあいまいな形で非主流派の宗教的实践の方に傾きははじめ、国教会の周縁部に活路を見いだしていく<sup>13</sup>。

ただしウェスレー自身の考え方では、労働者は雇用者に対し、ロード大主教が説いた王権神授説およびアルミニアニズムにもとづく絶対的服従の教義に従うことになり、社会を共同体として成り立たせるため必要な労働を甘んじておこなうことが求められる。したがってウェバーが述べた労働倫理という「鉄の檻」(Weber 1920:202-204=1989:363-366)は、ウェスレーにあっては、予定説ではなく、王政末期に提唱された下位者の上位者への服従という中世回帰的な論理で正当化されただろう<sup>14</sup>。

さて、ここでバージェス博士論文におけるメソディズムと初期の労働組合運動の関連づけに視線を戻す<sup>15</sup>。バージェスのテキストから問題の部分を抄出する。

労働運動が、何かの意味でメソディストの群れに抱かれた教理による信仰に結びつけられていると、言いつのるつもりはわたしにはないが、個人の発達と指導者としての能力に対し彼らが提供した機会が、労働運動の発端において重要だったということは確信している。9歳の頃からの貧しい農業労働者で、聖書や週刊新聞以外、知的な世界との接触がないジョセフ・アーチ (Joseph Arch) は、長じて地方説教者となり、彼は英国の農業労働者の連合運動の創始者かつ推進者となった (Heath 1893:232)。メソディストや非国教会の牧師は、初期の労働運動で顕著な役割を果たした。ジョセフ・R・スティーブンス (Joseph R. Stephens) は工場立法の提唱者かつチャーティストとして祝福された (Webb & Webb [1894] 1911:287-288) が、彼もメソディストの説教者だった。労働者の組織での活動のために、7年間の追放刑の判決を受けた6人のドーデットシャーの労働者たちは、素朴な心をもったメソディストであり、そのうち二人は巡回説教者 (itinerant preachers) だった。1834年ロンドンでの抗議のための大行列は「馬上の非国教会教区牧師に率いられていた」(Seignobos [1899] 1907:50)。労働者の教会への参加の影響の程度は、労働者階級国民連合 (National Union of Working Class) が「メソディスト派 (Methodist connexion) の組織図をお手本とした組織」(J.A.H. 1893:178) だったという事実に示されている。したがって労働者階級の宗教運動は、より活発な道徳的知的発達に対する媒体となるだけではなく、組織された経済運動の指導者や活動のパターンも提供していた。(Burgess 1916:150-151)

ここでバージェスが主張したキリスト教の教派活動と労働組合運動の結びつきは、執筆当時の歴史、社会学界の定説ではない。たとえばバプティストの教育機関であるシカゴ大学で、英国教会牧師の息子であるバージェスや、バプティストの牧師としてコンゴ伝道にも派遣されたエルスワース・フェアリスの指導下に、1924年と1930年に博士号を取得した2人の社会学者、ケネス・バーンハートとハービー・ロックの研究では、メソディストや合衆国北部のバプティストの指導者たちは、労使の対立を必然化する労働組合運動には否定的な態度をとっていたという (Barnhart 1924; Locke 1930)<sup>16</sup>。

引用文中でバージェスが依拠している論者や文献は、ジャーナリスティックな社会主義的運動の報告者であるリチャード・ヒース、フェビアニズムの著名な著述家にして政治家、ウェッブ

夫妻、フランスの歴史家、シャルル・セニョボス、そして『英国著名人評伝辞典』(*Dictionary of National Biography*)の4件である。ウェッブ夫妻の『労働組合運動史』(Webb & Webb [1894] 1911 = 1973)では、当該のメソヂストの説教者たちの名前は通りすがりに触れられただけのように見え、詳しいコメントは与えられていない。ほかに著者たちの引用も、断片的な記述を取りあげているに過ぎず、バージェスの主張の傍証にしかならない。要するにバージェスは英国現代史、社会主義史に関する知見として執筆当時の定説とは見なしえない論点を、あえて断片的な資料を綴りあわせるように語っている。実のところ、プリミティブ・メソヂストの教派に属していた著者が労働問題について知見を深め大学教師となってこの点を確証する著作を出版するのは1930年代後半であって、バージェスの博士論文はそれを20年ほども先取りしている<sup>17</sup>。

メソヂストに関連する諸研究を検討すると、バージェスが論じたプリミティブ・メソヂストの巡回説教者から初期の労働組合運動化が輩出するメカニズムは、以下の四点にわけて考えられる(鎌田2016a:56-57)。

1. 野外集会 (field meeting, open meeting, camp meeting など)。
2. 独自の儀式と基準にもとづく新任牧師への接手礼。
3. 組会 (くみかい, class meeting)。
4. ウェスレーやその後継者が形成する本流からの影響を、部分的に遮断する傍流の隔絶された集団の形成。

簡単にその意義を解説する。

1の野外説教はウェスレーの友人でカルヴァン派メソヂストといわれるホウィットフィールドが、国教会の教会では赴任先を与えられなかったため、大聴衆の信仰心を驚つかみにする演劇性にあふれた彼の説教の力を、存分に発揮すべくはじめた方法である。それを見てウェスレーも伝道活動に取り入れた。ただし、教会外での説教を禁じていた英国教会の規律には違反する。

2の接手礼は、ウェスレーの晩年、アメリカ独立後の伝道のためにはじめてなされた<sup>18</sup>。現地から司祭の資格のある国教会の牧師が本国に送還されてしまい、聖餐式や洗礼式を執行する司祭でもある伝道者を任命するため、一司祭であるウェスレー自身に接手礼を施す資格がないにもかかわらず、それをおこなった。その経験から、イギリスにおいても必要に迫られて、国教会の司祭を監督する主教の許可を得ずに地方の説教者に接手礼を施すようになった。国教会では、新任の聖職者の任命は国王の権限であり、もちろん一介の牧師が自分の判断で司祭の資格を与える接手礼を施すことは認められていない。

3の組会は、アメリカへの伝道をともしおこなったモラヴィア同胞団でおこなっている実践を、メソヂズムでも取り入れたもの。教派の地方組織の一端として聖書や社会問題についての学びの場を設け、そこで文字を習い社会的発言をする力をもつようになった信者から、優秀な人を巡回説教者に抜擢した。こうした仕組みから、やがて地方の信者たちが国教会内部の宗教運動として中央集権的に組織されたメソヂズムの本流から独立し、独自の活動をはじめることにも可能になった。

その結果、4の分派活動の一つとしてプリミティブ・メソヂストと呼ばれる群れが形成され、そこから炭鉱や工場町での労働組合運動の初期の指導者が輩出することになる。こうした事実は、バージェス自身もいくつかの文献からの引用として博士論文に書きこんだように、伝記と評伝の国であるイギリスで作成された多様な人物の生涯の記録のそこかしこに述べられている。しかし、バーンハートとロックの博士論文に従い先述したように、マルクシズム、社会主義やキリスト教の各種教派本流の見解としては、宗教と労働組合運動は切りはなして考えら

れることが多かったので、論じられる機会が少なく、目に付きにくいものとなっている。

さらにバージェスが先の引用文でも依拠しているウェッブ夫妻の文献に注目し、そこから得られる含意を上記の知見に結びつけよう。ウェッブ夫妻は『労働組合運動史』(Webb & Webb [1894] 1911=1973) でイギリス各地の労働組合に残された記録文書を博捜し、各職種、各地域の運動について要約、集大成した。彼らはその知見を政治綱領化し、国民全体にかかわる施策は法律を改正して実現することを目指し、個別業種にかかわる条件闘争は各組合の雇用者との団体交渉によって実現するという方針を採り、特に8時間労働制や児童労働の禁止、また各組合で採用していた労災保険に関して、それらを国民単位で充実させるという発想を發展させて、国民全体の福利厚生を図る健康保険や年金制度を構想していった(Webb & Webb [1897] 1902= [1927] 1969)。この方針は、第二次世界大戦後、ベヴァレッジ報告を通じて一般的な政策パッケージとして取りあげられ、イギリスに限らず世界各国に広がっていった<sup>19</sup>。

メソディズム宗派活動と労働組合運動、そして福祉国家体制へとつながる糸は、限られた何人かの活動家の存在を通じて確認されるか細いものに過ぎず、その関係を統計的に計測できたとしてももちろんごく弱い相関を示すものでしかないだろう<sup>20</sup>。それでも、こうした関連づけにより、メソディズムの分派であるプリミティブ・メソディズムから労働組合運動の初期指導者が輩出し、労働組合の相互扶助実践を政治綱領化したフェビアンたちの活動が接続されて、資本主義の枠内で社会主義的政策の実現を目指す現在の福祉国家政策がつむがれた経緯の一端が、意外な事実の連鎖として観察できるようにはなった。

#### 4. プリミティブ・メソディズムと労働組合運動の社会的世界論

ピューリタン革命の直前に、王権神授説との組み合わせで予定説をやわらげるアルミニウス派の教説が、ロード大主教により提唱され、名誉革命後には臣従拒誓者たちの極度に保守的な宗教活動として、国教会内部で、いかに伝統的儀礼をまじめにおこなうかという点をめぐり生じたメソディズムは、国教会の保守的最右翼と思われる。そして国教会内教派としてのメソディズムからプリミティブ・メソディズムが分派し、その巡回説教者の一部が初期労働組合運動の指導者となり、彼らの運動を含む各種の労働組合の活動方針や目標をフェビアンたちが整理し、政治綱領化して、福祉国家の思想的源流が生まれた。すなわちそれは、国教会の最右翼という土壌から、急激な革命は否定するものの漸進的な社会改革を志向し、現在の福祉国家の理念に近いものを提唱する社会運動が、発生する一筋縄では説明できないような経過の記述となる。こうした歴史過程は、第2節で説明したように、ストラウスの提唱した社会的世界論の枠組で整理できる。

この場合、特に、プロテスタント諸派に特徴的な分派活動が可能になったことが大きな役割を果たしている。メソディズムという教派において、国教会の指導が及ばない地方での伝道をどのような立場でおこなうかという実践をめぐり、プリミティブ・メソディズムという分派が生じ、その一部が炭鉱や工場町での信者同胞の生活化以前のために相互扶助や団体交渉に携わり、労働組合活動と合流する。そうした多数の労働組合運動の資料を整理することで、世界中に福祉国家化をもたらす政策の骨子が抽出された。こうした過程は、ピューリタン革命、名誉革命を経た国教会の状況から、理論からは演繹しようがない結果が生みだされたことを示している<sup>21</sup>。

ウェーバー同様に文書資料によりイギリスの社会史を整理したバージェスの議論が曲がりなりにも執筆後20年を経て確証されたのは、まずバージェス自身がイギリスにルーツをもつ移民の出身であり、家族の伝承として18、19世紀の当地の宗教的な社会状況について聞きしつ

ていただろうことと、イギリスで特に充実している人物評伝を周到かつ丁寧に利用したところによるとと思われる。

ここでストラウスの社会学的世界とアリーナのモデルに即して、1、上記のメソディズム内部の分派形成の動き、2、炭鉱町などでの生活支援のための互助活動および労使交渉の指導を通じた労働組合形成、3、労働組合史の研究から労働政策、福祉政策を抽出することをそれぞれ別個のアリーナと見なし、社会的世界の形成、分岐、合流、消滅を意識して、出来事のフローチャートを作成した（図 1-3）。

こうしたアリーナは同時代に平行して存在しうるものだが、複数のアリーナに、同時に準拠して活動する個人は、比較的、少ないと思われる、各アリーナはお互いに接点や交点をわずかに共有しながらも、ほぼ独立して存在しているものと思われる。

この場合、国教会の牧師不在の貧しい地域で信仰の需要を満たすために設置、派遣されるプリミティブ・メソディストの巡回説教者という立場の人たちが、その両側にまたがった生存や活動を保持したために、アリーナ 1 と 2 への連結が生じたと考えられるだろう。

アリーナ 2 から 3 への移行は、労働組合の活動が蓄積され、綱領や委員会議事録を整理し、各個組合の記録を横断的に閲覧して概略をまとめようとするウェブ夫妻の試みにはじまり、国民的効率への関心から、労働運動として法レベルで改革されるべきテーマが抽出されるという夫妻の言論、政治活動がその結節点となっている。

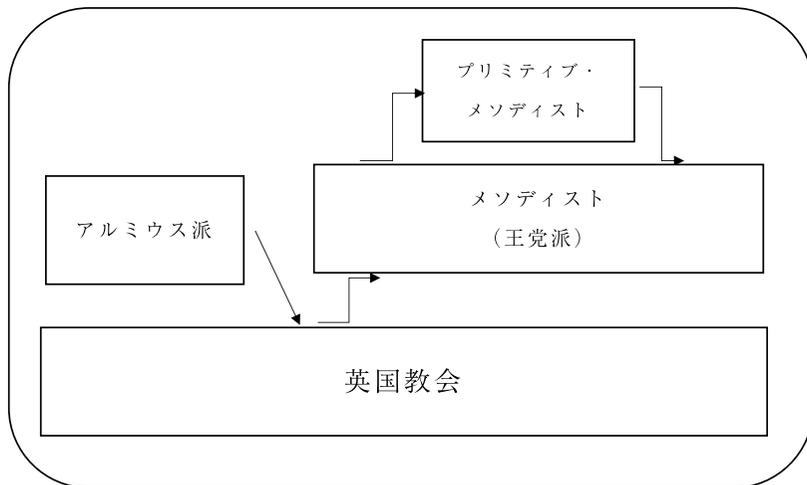


図 1：信仰のアリーナ

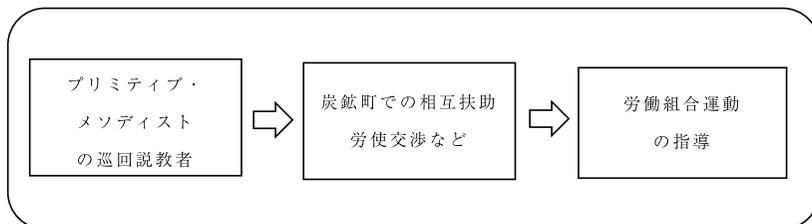


図 2：炭鉱町での生活改善のアリーナ

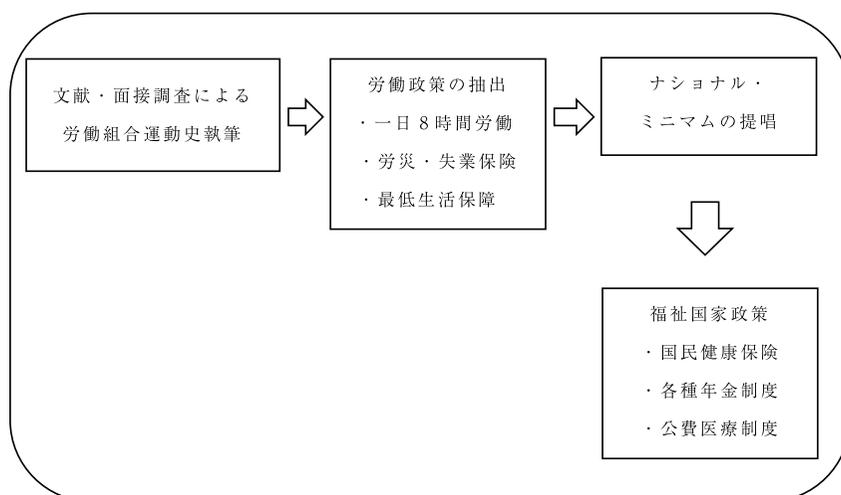


図3：フェビアンによる政策抽出・策定のアリーナ（福祉国家理念の形成）<sup>22</sup>

いずれにしてもかなりの部分、こうした移行は歴史の偶然の作用により生じたものと考えられる。しかし、社会的世界とアリーナのモデルをもちいれば、出来事の概略を簡易に一覧できるようになる。

ストラウス自身が看護学研究者と協同して、医学部の論文に拮抗しうるようなマニュアル化を心がけたため、現状でのグラウンディド理論は、質的データを擬似的に量的データ並に扱う方向に傾く技法として発展しているように見える (Strauss & Corbin 1990=1999)。しかし、医療社会学、科学社会学に広がり、文書のみならずビジュアルデータも扱うように、歴史的研究にもひらかれた研究技法としてストラウスの遺産をもちいる提言はすでになされている (Clarke 1998, 2005; Fujimura 1996)。とすれば、シンボリック・インタラクショニズムの原点のひとつに擬せられる初期シカゴ学派の、指導的研究者であるバージェスの初期の業績を、社会的世界論やグラウンディド理論の観点から見なおす本論での試みは、意外にストラウスたちの社会学の方向性を、現代の研究者が正当に継承する方策ではないだろうか。

### まとめと若干の考察

バージェスの博士論文で描かれている18世紀から20世紀初頭にかけての歴史現象は、ストラウスの社会的世界とアリーナのモデルをもちいて、3つの位相に分けて考えられる。

1、英国教会の自浄作用のように、その内部会派として形成されたメソディズムは、いくつかの契機から中央の規制に従わない分派としてプリミティブ・メソディズムを生んだ。

2、プリミティブ・メソディストの巡回説教者のなかには、炭鉱町での生活向上のための相互扶助や労使交渉を指導し、労働組合運動の初期の指導者として活動した者がいる。

3、フェビアンであるウェップ夫妻は、数多くの職種や産業ごとの労働組合において、活動の歴史や各時代の綱領などを収集、整理し、『労働組合運動史』(Webb & Webb [1894] 1911=1973)を作成し、そこで描かれた組合活動の大枠から英国国民全体について必要とされる労働政策の骨子を抽出した (Webb & Webb [1897] 1902= [1927] 1969)。そしてそれを自身のナショナル・ミニマムや国民的効率の考え方も照らしあわせつつ、旺盛な社会的主張、議論を展開した。そして、

彼らとの議論から刺激を受けた多くの研究者や政治家により、現在、地球上のほとんどの国で、少なくとも理念レベルにおいては目標とされる福祉国家の考え方が整理されてきた。

こうした1, 宗教, 2, 生活改善, 3, 政策形成という3つのアリーナは、同時代に共存している、必ずしも交差, 交流するとは限らない。とはいえ、議会制民主主義を標榜するわが国の状況においても、2の国民の生活向上とと、3の政党による政策立案というアリーナは、本来、直結で交流が図られねばならないものと思われる。だがやはり往々にして両者は、行政訴訟やマスコミを通じた社会問題としてのクレーム申し立てなどの、長期にわたる抵抗や闘争を経てはじめて結びつきうるような、やや迂遠な関係にある。

ともあれ、本論のように、こうしたアリーナの交流を可視化することで、意外な展開を見せる社会現象の継起について、実証的理論的に考察する手がかりが得られる。

- 
- 1 本論は前稿（鎌田 2018）と学説史的認識を共有し、エスノグラフィの作成史、社会的世界論の着想にいたる経緯などに関する情報を補いあうものである。
  - 2 もちろん、教育、マスメディアなどを通じたコミュニケーション、図書館制度などの諸分野についても論じている（Burgess 1916:182-202）。
  - 3 バージェス博士論文の全体的構成については前稿（鎌田 2016, 2016a, 2018）を参照。
  - 4 特許薬（patent medicine）のような科学的知識の営利的活用や、オカルト的な知識の提唱を通じたあやしい社会運動などへの非難（Burgess 1916:185）。
  - 5 本論で、引用文中の [ ] は論者による文意理解のための挿入を示す。
  - 6 ここでクロリーのテキスト（Croly 1909:138）が参照される。
  - 7 この引用文が配置されているバージェス博士論文12章「社会化の認知的側面」（Burgess 1916: 182-202）を指す。社会化の情動、意志的側面は別の章で論じられる。
  - 8 ここでは、シカゴ大学で大学院生時代のバージェスが研究助手を務めていた教員であるジョージ・ヴィンセントの未公開草稿が参照される。
  - 9 ここではスモールの社会諸科学の知識の総合的集積体としての社会学の構想が、念頭に置かれていると思われる（Dibble 1975 など）。
  - 10 エンジニア、文筆家、芸術家などは、資格制限もなくごく一部の成功者のみが高い収入と威信を達成できる職種として社会学における専門職論では周辺的な位置を占める。医療専門職について鎌田（2018:43）、専門職としての芸術家について鎌田（1990）などを参照。
  - 11 歴史資料の活用について、ストラウス自身はアメリカの都市イメージ研究に取りくんだ際の経験をグラウンデッド理論の最初の方法論書において語っている（Strauss [1961] 1976; Glaser & Strauss 1967: 161-183=1996: 231-265）。
  - 12 本節では、バージェスのオリジナルな言及を、近年の英国史、キリスト教派史、経済史の研究成果で補い再構成している。また議論の過程で、バージェス博士論文と平行して執筆、刊行され、日本の社会学界でも権威ある業績として参照されるマックス・ウェーバーの、プロテスタンティズムと資本主義の発達についての議論（Weber 1920=1989）にもわずかに触れるが、彼の解釈は英国教会やメソディズムに関する歴史的事実には当てはまらず、教派史、歴史学ではすでに多くの批判的議論が存在するので、本稿では特に検討しない。ただし論者は、ウェーバー自身の研究者としての学問的知的誠実さについて露ほどの疑念もさしはさむものではない。
  - 13 ウェスレーの母は、名誉革命で追放されたチャールズ2世に忠誠を貫き、オランダから迎えられたメアリーとオレンジ公ウィリアムという新たな王室への忠誠の誓いを、家庭内の食事の際の祈りなどの場で拒否

- したので、牧師だったウェスレーの父はしばらく牧師館を出て別居していた。ウェスレー自身もそうした母の思想的政治的傾向に影響を受け、社会的混乱の渦中に成長した（野呂 1991:72-73）。
- 14 ウェスレーがカルヴァン主義者を非難し、論争を戦わせていたことを考えると、ウェーバーがメソディストをカルヴァン主義の予定説に促された現世的事業意欲の推進者として位置づけた描き方は、メソディズムに詳しい人の目には奇妙なものと同映たろう。しかし、ウェーバーの著作（Weber 1920=1989）の公刊後、同時代の宗教思想としてのカルヴァン主義からウェスレーが取り入れたものを探求する研究があらわれはじめた（馬淵 2003）。
  - 15 前稿（鎌田 2016a:51-60）では本論よりやや詳しく資料を検討した。
  - 16 フェアリスはプロテスタント教派史について独自の関心をもって論文も公刊している（Faris 1927）。シカゴ大学の社会学部の最初の教師たちのうち、スモール、チャールズ・ヘンダースンがバプティストの牧師であり、またヴィンセントの父はメソディストの牧師で、彼ら父子は半ば宗教的な成人教育プログラムであるショートカー運動の中心人物であるところから、プロテスタント諸教派史に関し学部教員全体に、かなりの基礎的素養が共有されていたと思われる。
  - 17 その著者であるウェアマスは、まさしくここで問題となっているメソディストの説教者の労働組合運動との関係を整理している（Wearmouth [1937] 1947=1994）。
  - 18 この項目についての前稿（鎌田 2016a:57）の記述には誤りがある。聖餐式や洗礼式を主催するには司祭の資格が必要であり、メソディストの説教者には、国教会の神学校出身でなく、その資格のないものも多かった。
  - 19 ただしウェップ夫妻の主張は、時代ごとの論争において、必ずしもそのまま実現されたわけではなく、バヴァレッジ報告においても少数派報告として記録にとどめられただけである。ただしそのナショナル・ミニマムの提唱や、LSE（London School of Economics）の創設などを通じて、彼らの見解は広く経済学者や行政学者に影響を与え、長い目で見れば、彼らの主張が多くの人の手を経て実現され、現在の福祉国家のフォーマットが出来あがったことに異論は出ないと思われる（江里口 2008）。
  - 20 メソディストの教派組織が初期の労働組合組織が見ならうべき雛形となり、礼拝と政治的討論を混合した式次第のあいまに、賛美歌とインターナショナルを合わせうたう労働教会（labor church）が流行した時期もあるという（Bevir 2011:278-297）。
  - 21 キリスト教の教派活動から分派が生じ、それを原動力として社会変動が生じるという議論をストラウスの社会的世界論同様におこなっているのが、ウェーバーの「プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神」（Weber 1920a=1968）（「ゼクテ」論文）である。ウェーバーはセントルイス万博に講演、討論者として招待され、その機会を、ほとんど調査旅行といえるほど自由に新たな知見を得るために活用した。彼は各地の教派の集まりを見学し、聞きとりを重ね、肌身に感じた実感に基づく議論を組み立てた。その点では、現状、参与観察と呼ばれる調査技法の萌芽的な実践とも考えられ、再評価が必要だろう。「ゼクテ」論文の注においては、メソディズムの組会活動や巡回説教者の特性について興味深い解釈も見られる（Weber 1920a:227, n.2, 230-231, n.6, 231, n.1=1968:105, n.39, 109, n.51, 52）。
  - 22 ウェップ夫妻の在世中に徐々に成立していった各種施策について歴史的経緯を追って詳述するのはあまりに煩雑なため、このアリーナにおける労働政策や福祉国家の理念の内容には、現在の日本ですでに定着した諸項目をあてている。

### 参考文献

- Abbott, Andrew, 1988, *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor*, Chicago: University of Chicago Press.
- Barnhart, Kenneth Edwin, 1924, "The Evolution of the Social Consciousness in Methodism," Unpublished PhD. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago.
- Bevir, Mark, 2011, *The Making of British Socialism*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

- Blumer, Herbert, 1937, "Social Psychology," Emerson P. Schmidt, ed., *Man and Society: A Substantive Introduction to the Social Sciences*, New York: Prentice-Hall, 144-198.
- Burgess, Ernest W., 1916, *The Function of Socialization in Social Evolution*, Chicago: University of Chicago Press.
- Clarke, Adele E., 1998, *Disciplining Reproduction: Modernity, American Life Sciences, and "the Problems of Sex"*, Berkeley: University of California Press.
- 2005, *Situational Analysis: Grounded Theory after Postmodern Turn*, Thousand Oaks: Sage.
- Croly, Herbert David, 1909, *The Promise of American Life*, New York: MacMillan.
- Croly, Herbert David, 1909, *The Promise of American Life*, New York: MacMillan.
- Dibble, Vernon K., 1975, *The Legacy of Albion Small*, Chicago: University of Chicago Press.
- 江里口拓, 2008, 『福祉国家の効率と制御——ウェブ夫妻の経済思想』昭和堂.
- Faris, Ellsworth, 1927, "The Sect and the Sectarian," *Publications of the American Sociological Society*, 32:144-159.
- Foucault, Michel, 1966, *Les Mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*. Paris: Gallimard. (=1974, 渡辺一民・佐々木明訳, 『言葉と物』新潮社.)
- 2004, *Naissance de la biopolitique: Cour de Collège de France (1978-1979)*, Paris: Gallimard/Seuil. (=2008, 慎改康之訳, 『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979 年度』筑摩書房.)
- Fujimura, Joan H., 1996, *Crafting Science: A Sociohistory of the Quest for the Genetics of Cancer*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss, 1965, *Awareness of Dying*. New Brunswick: Aldine. (=1988, 木下康仁訳, 『死のアウトエアネス理論』と看護——死の認識と終末期ケア』医学書院.)
- , —— 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. New Brunswick: Aldine de Gruyter. (=1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 『データ対話型理論の発見』新曜社.)
- Heath, Richard, 1893, *The English Peasant. Studies: Historical, Local, and Biographic*, London: T. Fisher Unwin.
- 宝月誠, 2010, 「シカゴ学派社会学の理論的視点」『立命館産業社会論集』45 (3) :45-65.
- J.A.H., 1893, "Lovett, William," Sidney Lee, ed., *The Dictionary of National Biography*, V.34, New York: Macmillan, 178-180.
- 鎌田大資, 1990, 「H・S・ベッカーの芸術世界論——前衛はいかに約定へとすり変わるか」『ソシオロジ』35(2):79-95.
- 2006, 「シェリル・クラインマンの感情社会学」, S. クラインマン・M.A. コップ, 鎌田大資・寺岡伸悟訳, 『感情とフィールドワーク』世界思想社, 187-232.
- 2010, 「分水嶺としてのバージェス——家族社会学とシンボリック・インタラクショニズムの交点」『人間関係学研究』8:17-30. (椋山女学園大学)
- 2011, 「アーネスト・バージェスの社会調査におけるケース・スタディと統計の相克——時期区分の試み」『椋山女学園大学研究論集』42 (社会科学篇) :177-192.
- 2014, 「市民社会をもたらす公共圏と社会的世界としての公共圏——社会学研究の礎石としてのハバーマスとシンボリック・インタラクショニズムの融合」『現代社会学部紀要』8(1):19-45. (中京大学)
- 2016, 「形成期のアーネスト・バージェスを解読する——序説」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 47:1-15.
- 2016a, 「アーネスト・バージェスの博士論文における 19 世紀の社会主義理解——メソディズム, 労働組合運動, フェビアンイズム」『人間関係学研究』14:49-66. (椋山女学園大学)
- 2018, 「アーネスト・バージェス博士論文における社会化研究——シンボリック・インタラクショニズムの祖型として社会的世界論を読みこむ」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 49:143-160.
- 岸田紀, 1977, 『ジョン・ウェズリ研究』ミネルヴァ書房.

- Locke, Harvey James. 1930. "A History and Critical Interpretation of the Social Gospel of Northern Baptists in the United States." Unpublished PhD. dissertation, Department of Christian Theology and Ethics, University of Chicago.
- 馬潤彰, 2003, 「ウェスレーとピューリタン」『ウェスレー・メソジスト研究』4:61-81. (日本ウェスレー・メソジスト学会)
- 野呂芳男, 1991, 『ウェスレー』清水書院.
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology*, 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press.
- Perkin, Harold, 1988, *The Rise of Professional Society: England since 1880*, London: Routledge.
- Seignobos, Charles (trans., S.M. MacVane), [1899] 1907, *Political History of Europe since 1814*, New York: Henry Holy.
- Shibutani, Tamotsu. 1955, "Reference Groups as Perspective," *American Journal of Sociology*, 60:562-569.
- 1962, "Reference Groups and Social Processes." Arnold Rose, ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston: Houghton Mifflin, 128-147.
- Strauss, Anselm L., [1961] 1976, *Images of the American City*, New Brunswick, NJ: Transaction Books.
- 1978, "A Social World Perspective," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119-128.
- 1982, "Social Worlds and Legitimation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.4, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 171-190.
- 1984, "Social Worlds and Their Segmentation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.5, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 123-139.
- 1993, *Continual Permutations of Action*. NY: Aldine de Gruyter.
- Strauss, Anselm and Juliet Corbin, 1990, *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*, Sage. (=1999, 南裕子監訳, 『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院.)
- Wearmouth, Robert F., [1937] 1947, *Methodism and the Working-Class Movements of England 1800-1850*, 2nd Ed., London: Epworth Press. (=1994, 岸田紀・松塚俊三・中村洋子訳, 『宗教と労働者階級——メソジズムとイギリス労働者階級運動 1800 - 1850』新教出版社.)
- Webb, Sidney and Beatrice Webb, [1897] 1902, *Industrial Democracy*, London: Longmans, Green. (= [1927] 1969, 高野岩三郎監訳, 『産業民主制論』法政大学出版局. 底本は 1920 年版)
- , —— [1894] 1911, *The History of Trade Unionism*, New ed., London: Longmans, Green. (=1973, 荒畑寒村監訳・飯田鼎・高橋洗訳, 『労働組合運動の歴史』上, 下巻, 日本労働研究機構. 底本は 1920 年版.)
- Weber, Max, 1920, "Die Protestantische Ethik und der «Geist» des Kapitalismus", Weber 1922: 17-206. (=1989, 大塚久雄訳, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.)
- 1920a, "Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus," Weber 1922:207-236. (=1968, 中村貞二訳, 「プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神」, 安藤英治他訳, 『ウェーバー 宗教・社会論集』河出書房, 83-114)
- 1922, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I. Bd. Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) .
- 山田園子, 1997, 『イギリス革命とアルミニウス主義』聖学院大学出版会.
- 山口健一, 2007, 「A・ストラウスの社会的世界論における「混交」の論理——相互行為と社会的世界との関係から」『社会学研究』82:103-123. (東北社会学研究会)
- 山中弘, 1990, 『イギリス・メソディズム研究』ヨルダン社.